

アメリカ風流小話

井 上 亮 治*

On American Humor

Ryoji INOUE*

I 昭和20年(1945)8月15日、わが国は史上未曾有の敗戦を喫した。そして10月半ば頃に名古屋地方にもアメリカの占領軍がぞくぞくと港から上陸してきた。

私は当時ぶらぶらしていても食うに困るので愛知県庁で募集した通訳業に応募し、受験して、即日採用された。そして翌日から生きたアメリカ英語に接し、好物の煙草も手に入り、高い給料を貰える身となった。

その頃活字に飢えていた私はアメリカの将兵向けの文庫本(Army Edition)を二、三冊貰ったり、また翌年の春あたりから書店の店頭にあらわれだした英語の定期刊行物(Reader's Digest, Time, Newsweek など)を購入して読みはじめた。そのなかでReader's Digestは月刊誌で30ほどの記事がわりに読みやすい英語で書かれていたので、通勤の車中でよむことにした。

その雑誌にはかならずアメリカの小話がところどころに載っていた。私ははじめてアメリカ式ユーモアに接した。そのなかには一読してすぐさま理解できるのもあったが、二、三度読んでも私の理解を越えるものもあった。

当時わが国で出版されている月刊誌などにはユーモラスな小話などはみあたらなかった。近ごろでは、わが国の週刊誌などの最後のページにアメリカあたりの小話を訳したのが載っている。その頃読んでいまでも覚えているのは次のような小話である。

あるアメリカの大学の卒業式で、学長が飾り気のないスピーチ(unvarnished speech)をしようとしたところ、講堂の椅子がニス塗りのばかりで(varnished)、6月頃の湿度のために乾きがわるかったのであろう。そこで、学長は開口一番、「私は本日、皆さんに unvarnished speech をしようと思いますが状況が許さないのです・・・。」といったところ、参列していた学生、教師が大笑いした、というような話であった。

わが国の大学の学長なり首相が堅苦しい(formalな)場所でそのような冗談をいうであろうか。つい先ごろもアメリカの大統領が来日して、晩餐会の席上、突然気分がわるくなって倒れかけたことがあった。そのとき大統領夫人はすかさず、「大統領はその日の午後に日本の首相とテニ

*外国語系列 (Department of Foreign Languages)

スをして負けたためである。」と冗談をとばして、その場をうまくつくろったのはわれわれの記憶に新しいところである。

一昔前アメリカにいたころ、二、三度大学町の映画館にでかけたところ、アメリカ人は滑稽な場面になると大声で爆笑するので、登場人物の声がかき消されるほどであった。

われわれ日本人は喜劇よりも悲劇を愛する国民であるようで、わざわざ泣くために映画とか芝居を鑑賞するらしい。わが国の流行歌の歌詞には、「涙」、「泣く」、「悲しい」、「切ない」などの言葉がかならずある。(注1)

Ⅱ 英語の Humor (または Humour) という言葉はいまでは「ユーモア」といわれている。あえて日本語であらわせば、「滑稽」とか「おかしみ」とでもなるだろうか。これはラテン語に由来する。その意味するところは、「液体」とか「湿り気」ということであった。14世紀ごろの英語の Humour は「水蒸気」とか「(動物の) 体液」であった。しかしその後、人の体内にある液体を意味するようになった。古代ギリシャの医学者ヒポクラテスが唱えた理論によると、「人の体内には四種類の基本的液体がある。つまり、血液、粘液、黒胆汁、と黄胆汁」である。そしてその四つの Humour のバランスの状態によつて人の体質と気質がきまってくる。血液が優勢な人は明朗快活な多血質となり、粘液が勝てばものぐさな怠けものとなり、黒胆汁が多ければ短気な癪しゃくもちとなり、黄胆汁なら陰気なゆううつタイプとなる、という。そして英語の Humour はいつのまにか「気質」という意味で使われるようになった。(注2)

また文芸上の概念として Homour Character というものがあつた。その気質、性情がとくに強くあらわれている劇の登場人物のことで、この考えかたにもとづいて盛んに芝居を書いたのがエリザベス朝の Ben Jonson であつた。当時絶大な人気を博したかれの芝居に登場する人物たちは Humour Characters であつて、その強い性情のために多くの道理にはずれた振舞いをした。このあたりから Humour という言葉は滑稽とか、かいぎゃくという意味をもつようになった。したがって、英語の Humour がいまの「ユーモア」を意味するようになったのはせいぜい18世紀以降のことである。(注3)

そもそも西欧の小話は汚いジョーク (Dirty Joke) こそその本来の姿であつたようである。しかし社会の中流階級の人々、つまり清教徒的道德を重んずる「お上品な」ひとびとはいまでもこのようなジョークを非難している。このようなジョーク集の刊行は西欧では16世紀からすでにおこなわれていたが、公然と印刷されるようになったのは20世紀も半ばすぎからのことである。とくに第二次大戦後、偽善道德にたいする批判がたかまり、1960年代になって、Kennedy が大統領になったころアメリカにも異変がおこり、言論の自由の運動が全米に広がった。そしていわゆる四文字語 (Four-letter words) を堂々と印刷した出版物が流行し、全面的に解禁されてゆく。因みに、ひところは英米の辞書にも載っていなかった Four-letter words がわが国の学習辞典にもとりいれられている。(注4)

西欧人は何故ジョークをいいあうのであろうか。笑うことは緊張のゆるみである。神経の緊張

によってたまったエネルギーが一気に解放されて発散するのが爆笑であり、ゆっくり流れでたのが微笑であろう。それであるから、笑いは活力にあふれ、緊張のおおきい人ほど、またそのような緊張をたえず必要とする状態におかれている人ほどおおく必要であるといえよう。

個人を基本とする競争社会が西欧の社会である。社会生活も家庭生活もいずれも個人にかかってくるプレッシャーの強さは日本人のように集団でことを解決する傾向にある文化のなかで生きているよりも西欧社会のほうがずっと強い。そこで笑いを生み出す欲求が社会のあらゆるところにみなぎっているのであろう。

Ⅲ 外国語（この場合は英語）で表現されたこのような小話は、話し言葉であれ、書かれたものであっても、外国語として英語（English as a Foreign Language）を勉強しているわれわれには一度耳できいたり、また一読しただけで理解できるとはかぎらない。ユーモアはその国特有の文化を背景としているものがおおく、その国で生まれ育った人とか、さもなくばその国によほど長らく在住していないと理解しがたいものである。

一昔まえ、ニューヨークの Latin Quarter という寄席劇場にいったことがある。そこでは歌、舞踊と寄席芸人によるユーモラスな小話があったが、正直なところ、それらは半分くらいしか理解できなかった。

その後まもなくアメリカのある大学に滞在していたおり、Bennett Cerf の *Laugh Day*（注5）という文庫本を読んで、わからないところをアメリカの友人たちに尋ねたことがあった。そのときかれらは、「・・・ユーモア話は外国人にはそれほどたやすくわかるものではない・・・。」といった。

私は学生時代を含めると50年くらい英語を勉強してきているが、まだもって、英語で表現されたすべてのそのような小話をたちどころに楽しめる境地には達していない。しかし外国語の勉強にはその国の言葉で表現されたその種のものに接するのもまた一つの仕方でもあろう。

私の手もとには参考文献に挙げてあるようにいくつかのユーモラスな読みものがある。小話集ではないが、*The Best American Humorous Short Stories* には44編の面白い物語がある。ふるいところでは Mark Twain から新しいものでは James Thurber のものもいくつかある。とくに Thurber の作品はわりによくわかるので何回も読んできた。

またいくつかの面白い小話を覚えておいて、アメリカの友人たちとくつろいで話をしているときなどに、話してきかせるとかれらは大笑いしたこともある。またそれらを私流につくりかえて話すと、おおいに受けたこともある。

西欧の人々（とくにアメリカ人）はわれわれ日本人が冗談もいわず、あまりにも真面目すぎるのを好まないようである。ユーモアのセンスのない人との交際はつまらないと思うらしい。わが国の役人たちが西欧（とくにアメリカ）の高官あたりからあまり高く評価されないのもこのへんにあるのではないであらうか。

私はいままでいろいろの職場（大学、企業など）で聞き取り（Listening Comprehension）とか

作文 (Essay-Writing) の訓練としてわりにやさしいアメリカの小話を教材にしたことがある。それらはほとんど Reader's Digest からのものである。二、三例示する。

The London Sunday Times prints the following conversation between a visiting American and an Eaton schoolmaster:

"Do you allow your boys to smoke?"

"I'm afraid not," said the Eatonian.

"Can they drink?"

"Good gracious, no."

"What about dates?"

"Oh, that's quite all right," said the master, "as long as they don't eat too much."

(ロンドンのサンデータイムズ紙はイギリスを訪れているアメリカ人とイートン校の校長とのあいだにかわされた次のような会話を掲載している。

「あなたの学校では生徒に喫煙を許していますか。」

「いや、残念ですが、許していません。」

「飲酒はどうですか。」

「とんでもない。だめですよ。」

「では、デートはいかがですか。」

「そうですね、食べすぎなければかまいません。」

Date はアメリカ英語ではもちろん「デート」を意味するが、イギリス人はそれを「ナツメヤシの実」と解したところにこの小話の面白さがある。アメリカとイギリスではおなじ言葉 (Word) がまったくちがった意味をもつことがある。(注6)

When we were in Japan, we noticed one day that everyone was wearing a flower with a small card attached. A young Japanese girl explained that it meant "Thank you, Mother." Surprised that the Japanese also celebrate Mother's Day, my husband asked, "And do you observe Father's Day, too?" She smiled and said, "In Japan every day is Father's Day."

(私たちが日本に滞在していたとき、日本人のだれもが、ちいさな紙切れのついた花をつけているのに気がついた。日本人の小さな女の子がそれは「母の日」のためのものである、と説明してくれた。日本人も「母の日」を祝うと知っておどろいたわたしの主人は、その子に「父の日もお祝いするのですか。」と尋ねると、その子はいっこり笑って、「日本では毎日が父の日です。」と答えた。)

これは日本のことを題材にしているので、高校卒業ぐらいの英語力があれば、すぐに理解できよう。

It was an important dinner, and the host, giving last minute instructions, reminded the cook not to serve the salad dressed, but to serve it undressed, since he wanted to take care of that detail himself.

But at the salad course he was horrified to see the cook, clad only in her slip, come through the door carrying the salad bowl.

“What’s the meaning of this?” he asked, “You said undressed,” she retorted, “but this is as far as I go.”

（大切な晩餐会であった。主人は最後の指図をあたえてから、料理人にサラダにはドレッシングをかけないでくださいように注意した。というのは、主人は細かいことは自分でしたかったからである。しかしサラダがでることになると、料理人が、スリッパ一枚の姿でサラダボールをはこんでドアからはいってくるのを見て主人はおったまげた。

「これはいったいどうしたのか。」と彼はたずねた。すると彼女は、「衣服をつけないで、といわれましたね。しかし、これがせいぜいです。」と答えた。）

～undressed は「～にドレッシングをかけないで」と、「なにも身にまとわないで」の二つの意味をもたせた小話。

IV ここでは Evan Esar 著 *The Humor of Humor* という書物を参考にしながらアメリカの小話を解説することにする。

A. 小話にはどのようなものがあるであろうか。

1 Wisecrack（びりっとした冗談）

一般にいて、いかなる才気煥発な批評でもよい。厳密には当意即妙な言、つまり名言。

They were going to give the bride a shower, so he brought a soap.

（かれらは花嫁に結婚式のお祝い品を贈るパーティーを開こうとしていた。そこで彼は石けんをもっていった。）

これは shower という言葉に一般の「シャワー」と「(花嫁などに) 贈りものをするパーティー」

の二重の意味がある。

He's a man of letters; he works in the Post Office.

(彼は文学者である、なぜならば郵便局につとめているから。)

a man of letters は「文学者」とか「著述家」という意味である。もちろん, letter(s) には「手紙」という意味があるので, 「手紙を扱う人」で「郵便局で働いている」ことになる。

2. Epigram (警句)

Wisecrack は, きまった個人のことをいうが, Epigram は一般に集団の人々とか物事に言及する。

The best way to tell a woman's age is not to.

(女性の年齢をあてるもっとも良い方法はそれを言わないことである。)

Man is not the apex of Creation but the ex-ape.

(人は創造物の極致ではなく, 以前は猿である。)

これは apex [éipeks] という言葉と ex-ape [éks éip] (ex- は「前の」を意味する接頭辞。たとえば, ex-wife は「先妻」のこと)。という音の類似をたくみにもちいている。日本語に直しては面白さは失われる。

3. Riddle (判じもの)

これはこどものよくやるもの。

Should a person stir his coffee with his right hand or his left hand?

Neither. He should use a spoon.

(コーヒーは右手か, それとも左手でかきまぜるのがよいでしょうか。どちらでもない。スプーンを使うのがよい。)

4. Conundrum (とんち問答)

これは言葉遊びを基本にして, 17世紀イギリスで流行した。そして18世紀に頂点に達した。これもいささかこどもじみている。

Why is a looking-glass like a philosopher? Because it reflects.

（鏡はなぜ哲学者に似ているのでしょうか。熟考するから。）

Reflect という言葉は「（鏡などが）反射する」という意味と「（哲学者などが）よく考える」の二つの意味がある。

5. Gag（ギャグ、入れぜりふ）

これはわが国でも漫才師などがよく用いる手法。

Gag の典型的なものは、質問と答え、また質問にたいして質問するという形式をとる。

Why do you drink liquor?

What would you suggest I do with it?

（何故お酒を飲むの。ではそれをどうしろというの。）

もともと Gag という言葉はアメリカで南北戦争よりも前に Minstrel Show（通例黒人に扮した白人が黒人の歌や踊りなどを演ずるショー）といっしょに上演される喜劇を意味した。そして寄席（Vaudeville）が盛んになるにつれて、ますます広がった。しかしラジオの普及とともにジョークにとってかわられた。

6. Joke（ジョーク）

ジョークはギャグと Anecdote（逸話）に似ているが、対話形式をとるギャグよりもながく、逸話よりも短いものをいう。

美しいブロンド娘が手術のために手術室のすぐ外で担架にのせられたままほっておかれた。看護婦がもどってくるのをまっているうちに、白い仕事着をきた若い男があらわれ、シーツをもちあげて、その下をちらりとのぞいて、一言もいわずにたち去った。

また次の男もそのようにした。三人目の男がちかづいてくると、患者は、「私はなんのためにここにいるのですか。手術をされるためですか、それともみなに見てもらうためでしょうか。」と。三人目の男は、「知りませんね。医者にきいたほうがよいでしょう。私は廊下で仕事をしているペンキ屋ですよ。」といった。

これは典型的なジョークである。というのは、まずあつかうのが短い一つの出来事、不必要な細かいところはいっさいはぶいてある。そして、それはある場面からはじまり、中間はなく、予期しない結末に終わる。はじめは一般に描写的で、おわりは話し言葉になっている。

7. Anecdote (逸話, 奇談)

未発表の個人の噂話し, それはこっそり知られているだけのもの。いまでは未発表のものだけではなく, ともかく面白い出来事を意味するようになった。

Mark Twain は若いころ西部で新聞の編集をしていたことがある。そして借金取りをうまくごまかしていた。毎日請求書の束がくると, 機械的に屑籠にすてていた。ある日, また一通の請求書がきたが無視した。すると給仕が, 「裏をみたほうがいいですよ。すぐ送金しないと訴えられますよ。」といった。Mark Twain はそれをつっかえして「そのたぐいの写しをどう始末するのかしっているだろう。両面に印刷されている書類は問題にしないと言って, 正式の手紙をつけて送り返しなさい。」と。

このような Anecdote は Reader's Digest の *Life in these United States* というページに載っている。(注7)

B. 小話をつくる手法としてはどんなものがあるであろうか。

1. Chain (鎖型) は読んで字のごとく, 鎖型のもので, 一連のものごとを鎖でつなぐようにして作る小話。

ティファニー (Tiffany) の店で値段の高いブローチをみつけた女性が夫にいうには,

Look, John, at that beautiful pin. That's exactly what I need to go with the suit I saw at Saks First Avenue that would go so perfectly with the Lilly Dache hat I told you about.

(ねえ, あなた, あの美しいブローチを見て。あれは前に話したリリーダシュの帽子にぴったり似合う, 一番街のサックスの店で見たスーツにまさにうってつけのものよ。)

2. Round (循環型) これは一巡してもとへもどるもの。

In Iowa they raise more corn to feed more hogs to buy more land to raise more corn to feed more hogs.

(アイオワ州では豚にもっと餌をやるために, もっとトウモロコシを栽培し, そのためにはもっと土地を購入し, またそのためにはもっと豚に餌をやり, そのためにはもっとトウモロコシを栽培する。)

これはいささか子供じみている。

ある男性が禿をいかにして直すかという小話。

その人は薬を4錠飲む必要があった。1錠飲むと一夜にして髪が生えた。しかしものすごい頭痛がした。2錠飲むと頭痛はおさまったが、こんどは顔面に痙攣がきた。3錠飲むと顔面痙攣はなくなったが、吐き気をもよおした。4錠飲むと吐き気はおさまったが、また禿になった。

3. Pendulum（振り子型）

これは時計の振り子のように、ひとつの意見から別の意見にいったり戻ったりするもの。

一人の男が妻と話しあっていた。彼がいうには、「シカゴ行きの飛行機からおちた人のことを新聞で読んだかい。」彼女いわく、「なんと運の悪いこと。」「そうなんだ。しかし飛行機の真下には乾し草の山があったんだよ。」「なんと運のよいこと。」「しかしその乾し草の山から乾し草用の三つまたがつきでていたんだ。」「まあ、なんと運のわるい。」「しかしその男は三つまたのうえには落ちなかったんだ。」「でも運のよいこと。」「そうだ。しかしその男は乾し草の山にもぶつからなかったんだ。」

4. Blunting（鈍らせ型）

これは悲惨な知らせをもっと悲惨にするために、そうとはみせない手法。

ボビーは血のでている膝につけるヨードチンキがほしい、と母親にいった。母親は、「どうして切ったの。」と尋ねた。「別になんでもないんだよ。台所の梯子に登っていて落ちたんだ。」「台所の梯子？ お前はそこでなにをしていたの。」「にかわをとろうとしてたんだ。」「にかわ？ なんのためににかわが必要だったの。」「居間の花瓶を直したかったんだ。」「花瓶？ 花瓶をわったの。」「いや、ボールがあたったんだ。」「ボールが？」「そう、ボールが鏡にあたって、それがはずんで、花瓶にあたって、こわれたんだ。」「お前は居間でボールあそびをしていたの。」「いや、庭でソフトボールをしていたんだ。すると球が張りだし窓を突き抜けたんだ。はやく膝にヨーチンを塗ってよ。皆が待っているんだから。」

5. Reversible（ぎゃく戻し型）

もっとも典型的なものは、あまりにも言い古されたアダム（Adam）がイブ（Eve）に自己紹介をする言葉であろう。それは、Madam, I'm Adam.（奥様、私がアダムです。）日本語にしては面白くなくなる。これは前から読んでも後から読んでもおなじ文になる。日本語にも、「たけやがやけた。」つまり、「竹屋が焼けた。」など、いささかこどもじみたものがある。

Two men were discussing their marital joys and sorrows.

"My wife," said one, "is a poetic creature. Every day she gets up at sunrise and says 'Lo! the morn'!"

"My wife is just the opposite," said the other, "She gets up at sunrise and says, 'Mow the lawn'!"

(二人の男が結婚生活の喜びと悲しみについて話しあっていた。一人がいうには「私の妻は詩人ですよ。明け方に起きていうには、くご覧なさい。朝ですよ。」と。すると相手は、「私の妻はまったくその反対ですよ。明け方に起きると、く芝を刈りなさい。」と言いますよ。」といった。)

Lo! the morn' (=morning), は後からいえば Mow the lawn, と発音が似ている。

言葉ではなく、内容でもってする手法もある。

ドミニコ会とイエズス会の神父が庭を散歩していたとき、煙草がのみたくなかったので、おの修道院長に許しを求めようということになった。ドミニコ会の神父が戻ってみると、イエズス会の神父がいっぷくしているのを見て、怒っていった。「私は許されませんでしたよ。」するとイエズス会の神父は、「なにをお願いしたのですか。」と尋ねた。「黙想中に煙草をのんでもよろしいでしょうか。」と。イエズス会の神父は「ああ、そうですか。私は喫煙中に黙想してもよろしいでしょうかと尋ねました。」と瞑想するように煙をはきだしながら答えた。

6. Cumulative Humor (積み重ね型)

これは古くからの手法で、東洋とか中近東の昔話にみられる。中世に紹介されて、いまでは西欧一般で伝説になっている。

英語で書かれた有名なものは、Nursery Rhyme (童謡) にある *The House Jack Built* (ジャックの建てた家) であろう。これは次のような文の積み重ねである。

This is a house that Jack built. This is the malt that lay in the house that Jack built. This is the rat that ate the malt that lay in the house that Jack built.

(これはジャックが建てた家です。これはジャックが建てた家にある麦芽です。これはジャックが建てた家にある麦芽を食べたねずみです。)

英語で書かれたものは *Mother Goose* (マザーグースの歌) にもよくこの手法が使われる。またフランクリン (Benjamin Franklin) は *Poor Richard's Almanac* (貧乏なりチャードの暦) のなかでこの手法を用いている。

例えば, A little neglect may breed mischief, For want of a nail a shoe was lost.

（わずかな怠慢が損害を招く、釘が一本ないために靴がなくなったこともある。）

7. Nutshell（縮小型）

これ以上縮小できないほどに要約されたユーモラスな話し。

Two playboys

Two showgirls

Two bottles of Scotch

Two A.M.

Two cars

Two funerals.

（プレイボーイが二人いた。そこへショーガールが二人やってきた。そこでウイスキーを二本飲み干した。ときはまさに夜中の2時。二台の車で飛ばした。そして事故で死んだ。葬式が二つだった。）

もう一例。

He's hired.

He's admired.

He's inspired.

He's mired.

He's tired.

He's fired.

He's retired.

（彼は雇われた。そして仕事ぶりを誉められた。また激励もされた。しかし苦境に陥った。そしてくたびれた。そこで首になった。そして引退した。）

これは読んでみれば韻（Rhyme）を踏んでいることがわかる。

C. 上に述べた手法を用いるには言葉使いとしてはどのようなものがあるであろうか。

1. Spoonerism（スプーナ誤法）

これは Oxford 大学の学長であった W.A. Spooner がこの種の間違いを冒したことからその名前が使われている。二語以上の頭文字を置き換える誤り。

例えば, receive a *crushing blow* (壊滅的な打撃を受ける) というべきところを, receive a *blushing crow* (赤面するからすを受ける) などという。

ある大学の教師が学生の一人に, “You’ve *hissed* my *mystery* lectures.” (君は私のミステリーの講義をやじったね。) といった。これは, 「私の歴史の講義をききそこねた。」というつもり。つまり, *hissed* は *missed* で, *mystery* は *history* である。

2. Tongue Twister (早口言葉)

日本語でも「生麦, 生米, 生卵」などをはやくいうことは, われわれ日本人でもそれほどたやすくはない。Tongue twister は外国語 (つまり耳慣れない音声をもつ言葉) の発音練習にもなる。

英語でよく用いられるものには,

She sells seashells by the seashore.

これは [ʃ] と [s] という音の区別を練習するのによい。

Peter Piper’s practical principles of plain and perfect pronunciation.

(ピーターパイパーのはっきりした, 完全な発音の実際的な原理)

これはラジオとかテレビのアナウンサー志願者向けのテストにつかわれたりする。

3. Pun (地口, ごろ合せ)

これは同音異義語を用いることで, 「だじゃれ」, 「語呂あわせ」のことである。

A *reckless* driver is seldom *wreckless* long. (無謀運転をする人はほどなく遭難にであう。)

Many a blonde *dyes* by her own hand.

(ブロンドの女性はおおくは自分の手で髪を染める。)

これは *dye* (染める) と *die* (死ぬ) の Pun であるが日本語にしたのではおもしろくない。

Teacher: Where do we find *mangoes*?

Student: Where *woman goes*

(先生 「マンゴーはどこに生えているね。」)

生徒 「女性がゆくところにです。」)

これは mangoes .[máŋgouz] は man goes [máén gouz] と同音意義になる。

Pun は「だじゃれ」と訳してもよいほど、ユーモアのなかでは、あまり品のよいものではない。しかし Shakespeare をはじめ18世紀の文人 Swift などとはしばしばもちいた。今日でも多くの人々かよくやる手法。(注8)

4. Transposer (文字, 語句の置き換え)

これは文法用語で Metathesis といわれるもので、文字、シラブル、語、音などの順序を自由に置き換えて面白みをだす手法。

Some people love to go to movies and others go to the movies to love.

(映画を観に行くのが好きなひともあるし、また愛しあうために映画館に行く人もいる。)

The more patient pedestrians, the fewer pedestrian patients.

(歩行者がいまこしく我慢強ければ、怪我をして患者になる歩行者は減るであろう。)

Patient という語は「辛抱強い」と「患者」という二つの意味がある。

5. Antonymism (反意語をつかう手法)

Antonym は「反意語」のことで、反対の意味をもつ二つの語(句)を対照させておかしみをだす。

The girl with a future avoids a man with a past.

(将来性のある女性は過去のある男性をさける。)

Men think women cannot be trusted too far; women think men cannot be trusted too near.

(男性は女性というものをあまり信用できないと思い、また女性は男性があまりちかくにいると信用できないと思う。)

ここの far は「程度」をあらわし、near は文字どおり「(物理的に) ちかい」ことをいう。

6. Blendword (混成語)

For an occasion (ある場合のために) というのを fornication (正式の夫婦以外の男女が私通す

ること)となるようなことをいう。

cinema actor (映画の俳優) を cinemactor と一語にするようなこと。

これはイギリスの Lewis Carroll の *Alice in Wonderland* (不思議の国のアリス) のなかで作られた有名な言葉である chortle (うれしそうに声だかに笑う) は chuckle (くすくす笑い) と snort (鼻をならす) の blending である。また, scurry (ちょこちょこ走る) は scatter (ちりちりになる) と hurry (急ぐ) の blending で一般の辞書にもでている。

7. Repeatism (繰り返し手法)

But me no buts. (「しかし」「しかし」の連発はごめんだ。)

これは英語の文法書に例示されているもので, but という語を動詞と名詞に転用することをいう。

There is no time for the present for a present.

(いまは贈りものをあげるときではない。)

これは the present (現在) と a present (贈りもの) というおなじ言葉を繰り返して面白味をだした。

With some thieves the safest safes are unsafe.

(ある泥棒にとっては, もっとも安全な金庫でも安全ではない。)

Safe には「安全な」と「金庫」の二つの意味がある。

D. 小話のおかしみをだすためには, 言葉使いの間違いがおおきな役割をはたすことがある。

1. Malapropism (言葉使いの滑稽な誤用)

これはイギリスの劇作家 Sheridan の *The Rivals* (恋仇) のなかで Mrs. Malaprop の発する滑稽な言葉の誤用に由来する。

例えば, a nice arrangement of epithet (形容文句の適切な並べ方) というかわりに, a nice derangement of epitaph (碑文のご立派な混乱) などという。

ある軍隊の大尉は無学なことで知られていた。あるとき、中隊の整列のしかたが悪いので、次のようにどなった。

“What the hell the matter with this outfit? Every day you're getting more and more laxative.”

（「この部隊はどうしたことか。お前たちは日毎にますます下痢をしているではないか。」）

laxative（便通をうながす）とはもちろん lax（たるんでいる）の誤りである。

ある女性が保険会社に次のような手紙をかいた。

Unless I get my husband's money, I shall be forced to lead an immortal life.

（主人のお金がいらないと、私は不死の生涯を送らなければならなくなるでしょう。）

immortal（不死の）はもちろん immoral（不品行な）の誤用。

2. Boner（学生などがやるばかげた誤り）

歴史の授業で学生は、Socrates died from an overdose of wedlock.（ソクラテスは結婚生活のみすぎで死んだ。）

この wedlock は hemlock（どくにんじん）の誤り。

英語の授業中、学生は、An active verb shows action and a passive verb shows passion.

（能動動詞は行為を示し、受動動詞は情熱を示す。）とやった。

これは action という語にたいし、ついうっかり passion といった。

地理の授業で、Certain areas in California are cultivated by irritation.

（カリフォルニアのある地域はいらだちで耕されている。）

この irritation はもちろん irrigation（灌漑）のあやまり。

文学の授業で、*The Scarlet Letter* griped me intensely.（「緋文字」は私をつよく悩ませた。）

Gripe は grip（つよく引き付ける）の誤り。

3. Bull（滑稽な矛盾）

とんでもない矛盾したことを面白くのべるのに用いられる。

All men are not created equal;
Only two men were created equal,
And one of them was a woman.

(人はすべて 平等には創られてはいない。ただ二人だけが平等に創られた。そのなかの一人は女性であった。)

I've a great fancy to see my own funeral before I die.
(私は死ぬまえに自分の葬式をぜひとも見たいものだ。)

4. Goldwynism

これはアメリカの映画界で有名な Samuel Goldwyn という人が1940年代に Malapropism (上に述べた) の作り手として名をなしたことに由来する。

二, 三例示する。

I have been laid up with intentional flu. (私は自分の意志で風邪にかかっていた。)

この intentional flu とは influenza のこと。

They're always taking the bull by the teeth. (かれらはいつも雄牛を歯で捕まえようとしている。)

この teeth は horn (つの) のあやまり。

Take the bull by the horn は英語のきまり文句で「勇敢に難局にあたる」という意味である。

5. Double Blunder (二重のへま)

ある間違いをして、それを訂正しようとしてもう一つのへまをやること。

パーティーの席で、ある男が相手に、「あの隅にいるひどい顔の女性は誰ですか。」というと、相手は、「ああ、私の妻ですよ。」と答えた。「いや、あのひとではない。彼女の隣りにいるひとです。」すると、相手の男は、「あれは私の娘です。」といった。

もう一例。

フットボールの試合中、海軍の提督が遅れてきて、席を奪い合い、そこにいた水兵の足をふんずけた。水兵は見もしないで、「このとんま、足をのける。」といった。しかしすぐさま提督だとわかったので、「失礼しました。閣下、もう一方の足があります。どうか踏んでください。」とい

た。

6. Typographical Error（ミスプリント）

Mr. and Mrs. William Bates will entertain at open house Sunday, from three until tight.

（ベイツ夫妻は日曜日 3 時から酔っ払うまで私宅開放パーティーを催します。）

この tight はおそらく night のミスプリントであろう。Tight はアメリカの口語または俗語で、「酔っ払った」という意味。

例えば, He got *tight* from drinking too much. (彼は飲みすぎて酔っ払った。) のように用いる。

The doctor felt the patient's purse and declared that there was no hope.

（医者は患者の財布に触って、望みはない、といった。）

Purse はもちろん pulse（脈）のミスプリント。

「脈を診る」というのは、英語で feel one's pulse という。

次はミスプリントではないが、間違えやすい語句である。

Least but not last on the program was Mrs. Henry Ross.

（大切なことを言い残したが、ロス夫人が番組に出演されました。）

これはよく使われる句で、正しくは last but not least という。これは Shakespeare の Julius Caesar にでている。

7. Relapse（逆戻り）

これはなにか、うかつなことをいったり、おこなったりしてから間違いであることに気がつく。

ある裁判事件で弁護人がいうには、「裁判長、依頼人は家に侵入はしていないことを申し上げます。彼は応接間の窓が開いていたのを見て、右腕を入れて、二三のつまらない物品をとりぞいたのであります。依頼人の腕は彼自身ではありません。一方の腕だけで犯した罪にたいして、どのようにして罰するのか理解に苦しみます。」と。すると裁判長は、「うまく反対論をもちだしましたね。それに論理的にいうと、被告人の腕を一年の刑に処することができます。被告人はその腕といっしょについていこうが、いくまいが好きなようにするがよい。」といった。そこで被告人は落ち着いて、義腕をはずして、歩みさった。

E. それでは、いったいどのような人々がジョークの対照になるのでしょうか。

1. Hen-pecked husband (女房の尻に敷かれる亭主)

これは世界共通であろう。

あるおとなしい小男が街角で警察官にちかずいて、言った、「失礼ですが、私はもう一時間もここで家内を待っているのです。私に動くように命じていただけないでしょうか。」

2. Woman Driver (女性ドライバー)

ある男が、奥さんが車の運転を覚えるのにどれほどの時間がかかるかと尋ねられたので、「こんどの九月で10年になりますよ。」と答えた。

もう一例。

繁華街のちかくに車をとめたある女性に交通巡査がちかずいて、いった、「ここでなにをしているんですか。」するとその女性は、「駐車しようとしているんです。〈安全地帯〉という標識がありますから。」

3. Efficiency Expert (能率専門家)

ある能率の専門家が死んで、死体が葬儀場から運ばれているとき、彼は棺から起き上がって、つぎのようにたずねた、「幾人の人が私を運んでいるんですか。」と。会葬者の一人が、「6人です。」というと、その男は、「2人をやめさせなさい。4人でじゅうぶんです。」といった。

4. Mother-in-law (しゅうとめ)

ある夫婦のあいだの議論。

妻「お母さんのところへ帰ります。」

夫「帰らないでくれ。お前が帰ると、お前のお母さんがこちらにくるからね。」

5. Mad Psychiatrist (気のふれた精神科医)

ある精神科医は兵隊に、「もしもお前の耳を切ったらどうなるかね。」と尋ねると、兵隊は、「聞こえなくなります。」と答えた。医者は、「もう一方の耳を切りおとせばどうなるかね。」「見えなくなります。」「なぜ。」「帽子が耳の下まで落ちてくるからです。」

6. Chatterbox（おしゃべりや）

5年も妻に口をきいたことがない男が裁判所で尋ねられた。「お前がだまっているのはどうしてなのだ。」すると夫は、「はい、裁判長さま。妻の話しの腰を折りたくないからです。」といった。

もう一例。

公衆電話ボックスに一人の男が長いこといるので、外で待っているもう一人の男がいらいらして言うには、「失礼ですが、急いでいるのです。もう30分も電話しているようですが、一言も話していないんですね。」するとボックスのなかの男は、「わからないかい、家内と電話中なんだ。」と。

V. 結び

いままでみてきたように、アメリカの滑稽話はそれを作る側としてはいろいろな手法を用いている。そのなかでも言葉使いの面白さ（Wordplay）がいかに重要な役割をはたしているかということがわかる。

わが国では、古くから落語、狂言、川柳、狂歌などが大衆の笑いをさそってきたことはよく知られているところである。また近ごろでは井上ひさし氏の作品には言葉遊びがじつにたくみにつかわれていて、読者をしてまさに抱腹絶倒させる。

人の心がますます荒廃しつつあるわが国で、いま少しくわれわれ日本人がユーモアの心を養えば、日本の国ももっと住みよいところになるであろう。

〔注〕

- 1) 南博は「日本人の心理」のなかで、日本人の不幸感について興味ふかく考察している。
- 2) 「英和中辞典」（研究社、小学館）およびO.E.D.の*Humour*の項を参照。
in a good *humor* は「上機嫌で」という意味。また反対に in a bad (ill) *humour* は「不機嫌で」という意味。
- 3) 植松れい「ポケットジョーク」の解説を参照。
- 4) 一頃は英米の辞典類にも載せていなかった Four-letter words（例えば、fuck, cunt など）がわが国の学習辞典にすらでている。
- 5) この書物には1,000 ぐらいの小話が分類されて載っている。
- 6) Marckwart & Qrirk は *A Common Language*: のなかで、対談形式に「共通の言葉」である英語でもイギリスとアメリカとは、かなり異なっていることを、面白く語っている。
- 7) ひところ読んでいた Reader's Digest にはこのページがあったが、最近は見えていないので知らない。

- 8) 参考文献にあげてあるように Pun (ごろ合せ) はいまでもよく使われる。Moger の *The Pun Book* には Pun を17項目に分類して実例を豊富に載せている。

参考文献

- 1) Cerf, Bennett. *Laughter Incorporated*, Bantam Books, N.Y. 1955
- 2) " *Laugh Day*, Pocket Books, N.Y. 1967
- 3) Esar, Evans. *The Humor of Humor*, Horizon Press, N.Y. 1952
- 4) " *Esar's Comic Dictionary*, Horizon Press, N.Y. 1960
- 5) " *Joke Dictionary*, Grosset & Dunlap, N.Y. 1945
- 6) " *20,000 Quips & Quotes*, Doubleday & Co. N.Y. 1968
- 7) Gorden, H.C. *Punishment*, A Warner Communication Co. N.Y. 1977
- 8) Hefner, M. Hugh, *The Bedside Playboy*, A Playboy Press, Chicago 1963
- 9) " *The Playboy Book of Humor & Satire*, A Playboy Press, Chicago 1963
- 10) " *Playboy Party Jokes*, A Playboy Press, Chicago 1962
- 11) " *More Playboy Party Jokes*, " 1964
- 12) " *Still More Playboy Party Jokes*, " 1965
- 13) Linscott, R.N. *The Best American Short Stories*, the Modern Library, N.Y. 1945
- 14) Marckwart & Quirk, *A Common Language: British & American English*, Kenkyusha, Tokyo 1964
- 15) Moger, Art. *The Complete Pun Book*, Ballantine Books, N.Y. 1979
- 16) Nash, Walter. *The Language of Humour*, Longman London & N.Y. 1985
- 17) Thurber, James. *the Thurber Carnival*, Penguin Press 1959
- 18) " *Thurber's Dogs*, " 1959
- 19) " *Lanterns & Lances*, " 1960
- 20) " *Further Fables for Our Time*, " 1960
- 21) " *My Life and Hard Times*, " 1963
- 22) White, E.B. & White, K.S. *A Subtreasury of American Humor*, Pocket Books, N.Y. 1955
- 23) 阿刀田高 その他「お笑いを一席」 新潮文庫 1985
- 24) 阿刀田高 「ジョークなしでは生きられない」 新潮文庫 1985
- 25) 井上ひさし, その他「笑談笑発」 講談社文庫 1978
- 26) 植松れい編「ポケットジョーク」 角川書店 1985
- 27) 織田正吉「笑いとユーモア」 ちくま文庫 1986
- 28) 加島祥造「アメリカン ユーモア」 中公文庫 1990
- 29) 南博 「日本人の心理」 岩波新書 1970
- 30) 常盤新平編 「パーティージョーク」 1 & 2 集英社文庫 1983
- 31) 小稲, その他編「英和中辞典」 研究社 1985
- 32) 小西, その他編「英和中辞典」 小学館 1980
- 33) O.E.D. Second Edition Clarendon Press, Oxford 1989